

学校・博物館・フィールドの連携

— 佐倉城下町と檜枝岐村のフィールドワークの実践から —

千葉県立東葛飾高等学校 小関 勇次

1. 実施学年：高等学校第2学年地理選択者

教科・領域：総合的な学習自由研究民俗学選択者

2. 学習のねらいと博物館の活用

①主題名 「佐倉城下町の機能と形態」 (実施日:平成20年12月20日)

「城下町を歩こう！」 (実施日:平成21年10月3日)

「檜枝岐歌舞伎を教育資源とした学校・博物館・フィールドの連携」

(実施日:平成21年8月18日～19日)

②ねらい

地理Bの学習目標には、生徒の特性と学校所在地の事情を考慮して、「地域調査」を実施することとしている。「地域調査」すなわち「フィールドワーク」を実施することである。

フィールドワークをとおして、作業的・体験的な学習活動を重視するとともに、地図を活用する能力と地理的情報を分析・考察する能力を育むことを目標としている。フィールドワークにおいては、情報を収集し、学習活動を効果的に促進するためにも資料館・博物館の見学は不可欠である。しかし、ここ数年、博物館の児童・生徒の来館数は減少しているという。これは、少子化だけの影響でなく、学校としての利用(校外学習)や授業での取り組みが減少しているのではないかと考えられる。

このような経緯から、博学が可能で、学習成果の期待できる「魅力ある地域」＝「佐倉・檜枝岐」を選定し、フィールドワークを実施することとした。二年間の実践をとおして、博学の効果的な在り方やフィールドに学ぶ重要性について報告したい。

③国立歴史民俗博物館との関連

「佐倉城下町の形態と機能」

「城下町を歩こう！」

国立歴史民俗博物館 第2展示室「武士の館復元模型」

第3展示室「江戸橋広小路復元模型」「江戸図屏風」

佐倉城址公園 佐倉城下町(武家屋敷・順天堂記念館・その他)

「檜枝岐歌舞伎を教育資源とした学校・博物館・フィールドの連携」

国立歴史民俗博物館 第4展示室「比婆荒神神楽」

松尾恒一准教授(民俗学)による講義『日本芸能の流れと展開』

3. 指導計画 <実践1>

主題 「佐倉城下町の形態と機能」「城下町を歩こう！」

2 学年	地理 (27 名) (23 名)	単元名	身近な地域調査 「佐倉城下町の形態と機能」 「城下町を歩こう！」	予備調査 2 時間 フィールドワーク 1 日 事後調査 2 時間
------	------------------------	-----	--	--

(1) 学習のねらい及び指導要領との関連

地域の調査を通じて「身近な地域」を理解することが重要視されており、フィールドワークを実施して、作業的・体験的な学習活動を重視するとともに、地図を活用する能力と地理的情報を分析・考察する能力を育むことを目標とした。

(2) 使用資料

地図 1：25000 地形図 稲葉氏時代総州佐倉御城府内之図 昭和3年鳥瞰図佐倉
資料 「佐倉城の武家屋敷跡は語る」国立歴史民俗博物館

(3) 展開

過程	時間	○学習活動 ●学習内容	指導上の留意点	資料
導入	2	○調査対象地域の選定 ○佐倉城下町の読図 ●城下町の成立 ●城下町の発展 ●城下町の形態 ●城下町の機能 ●城下町の暮らしと文化 ○フィールドワークの方法	調査地域の範囲確認 地形図読解 地形図 1：25000 と古地図比較 地形図 文献やインターネットから城下町の考察 フィールドワークルート確認	地形図 1：25000 稲葉氏時代総州佐倉御城府内図 昭和3年鳥瞰図
展開	1 日	○フィールドワーク 佐倉高校→順天堂記念館→麻賀多神社→武家屋敷→佐倉城址公園 ○国立歴史民俗博物館見学	1：25000 の地形図にルートマップを作成し、ルートマップにはたどったコースの時間と位置を記録 国立歴史民俗博物館での調べ学習（問題解決学習）	佐倉ボランティアガイド 第二展示室 武士の館 第三展示室 江戸橋広小路復元模型 江戸図屏風
まとめ	2	○事後調査（レポート課題） (1) 佐倉城下町の概要 (2) 佐倉城下町の成立 (3) 佐倉城下町の構造と展開 (4) 佐倉城下町の生活 (5) 佐倉城下町の展望と課題 ○レポート提出（班単位）	参考文献・インターネット Web ページやアドレス・資料添付 フィールドワークの重要性の確認 感想をいれる→授業評価	調査報告書 アンケート

※民俗学の授業について

本校では総合学習（1 単位必修）を講座制で自由研究とし、歴史学・地理学・民俗学などは地歴公民科で担当している。報告者は民俗学の選択者を担当している。また、千葉県より 2007 年に「進学指導重点校」の指定を受けたことにより、大学や博物館などと連携し、

外部講師による高等学校の教科・科目の枠組みを超えた授業を展開できるようになり、このような授業を本校では「リベラルアーツ講座」として、土曜日・長期休業期間に実施している。

4. 実践の概要 <実践1>

「佐倉城下町の形態と機能」

「城下町を歩こう！」

(実施日:平成20年12月20日)

(実施日:平成21年10月3日)

①はじめに

地理の授業では、現地に出かけて、直接フィールドに身を置いて、自分の目・手・足など五感を通じて学び取る（感じる）ことが最も大切である。フィールドで学ぶことはなによりも教育効果が大きい。学校ではどんなに優れた授業であっても、それは所詮、疑似体験にすぎない。

佐倉は佐倉藩11万石の城下町であり、江戸防御の要に位置することから、徳川譜代の大名達が老中職に就いたため、「老中の城」ともいわれ城下町として発展した。また、戦前戦後を通じて軍事上（防衛上）の拠点として陸軍歩兵連隊が設置された場所でもある。

地域調査を「身近な」場所にこだわると学校周辺ということになるだろうが、本実践においては、「身近な」よりも「魅力的な」地域にこだわった。また、国立歴史民俗博物館を利用すれば、さらに効果的な学習が可能となる。そこで、学校での予備調査（学び）、博物館での展示・観察や専門的な研究者の解説（調べ）、フィールドでの体験（経験）の連携した学習を試みた。

②学校での予備調査

第一に、必要最小限の知識としてフィールドワークの方法について指導しておくこと。特に、地理の学問的特性から現地調査が不可欠であることは強調しておく。そのための予備調査や文献調査などの調査法や、地図の活用や読図についても学ばせておく。

第二は、フィールドに学ぶ価値について理解させておくこと。

現地に足を運び、「体験する」こと、「感じる」こと、を目的とした。

第三は、地理の学習内容である城下町の理解。

城下町の成立・城下町の発展・城下町の形態・城下町の機能・城下町の暮らしと文化などとした。2時間の授業なので、学習内容は、前年度実施した内容などをプレゼンすれば学習効率は格段によくなる。

③フィールドワーク（現地調査）

フィールドワークのタイムテーブル

9:00 京成佐倉集合→佐倉高校→順天堂記念館→麻賀多神社→武家屋敷→13:00 佐倉城址公園

昼食後に国立歴史民俗博物館見学→16:00 解散

過去に何度もフィールドワークを実施しているが、その経験から定員は20人くらいが望ましい。それ以上になると集団での列が長くなり、隊列が切れたり、交通の障害となったり、説明も聞きづらくなる。実施にあたっては、引率2名は絶対必要である。2名で前後に挟むことができ、緊急の場合、一人は現場に残ることができる。

講師については、引率者が説明することができれば問題ないのだが、専門的な案内が必要な場合は、講師を依頼する必要がある。佐倉市の場合ボランティアガイドが充実していて、事前に時間、場所、人数などを連絡しておく。本校は佐倉順天堂記念館と武家屋敷で案内していただいた。(写真1)



写真1 佐倉順天記念館（左）と武家屋敷（右）でのボランティアガイド 筆者撮影

今回のフィールドワークは地形図と古地図を持たせて城下町を歩かせた。古地図と比較することで城下町の変容がわかる。常に自分の位置を地図に落として、ルートを結ばせた。記録もすべて地図に残すことと条件を付けた。地図には収集した資料のすべてを記入する方がよい。写真であればどの位置から、どの方向でいつ撮ったのか記入する。また、スケッチであれば、どの家の間取りであるか、矢印などで明確にしておく。これは大切なことであり、経験上、野帳にわけて記録するよりも便利であった。(写真2)



写真2 「記憶」より「記録」(左) 武家屋敷(右) 写真は位置と記録と日時を地図に記録 筆者撮影

写真は「記録」に残るが「記憶」に残らないことが多い。後で写真を整理したときなどに思い出せないことはよくある。そのような場合は、簡単なスケッチをとると良い。例えば、方眼紙を用いての間取り図や、写真に写りにくい墓碑銘、景観などスケッチすれば、一本の線でも実感として記憶に残る。スケッチの技法はフィールドワークにおいては是

非習得させたい技能である。また、城址などのフィールドワークにはメジャーを用いるとよい。土塁や空堀などの高さや幅の記録をとることができる。

フィールドワークでは、事前学習をして参加しても、解説が不十分であったり、疑問点が生じたりする場合がある。このような問題を解決できる場として博物館は有効である。

今回、国立歴史民俗博物館との連携でさらに、理解を深めることができた。博物館で展示・レプリカ・ジオラマなどを使って、フィールドワーク後に、博物館で調べ直すことで問題を解決することができた。例えば、城下町の構造や城下町の生活などは、第2展示室の「武士の館」や第3展示室の「江戸橋広小路復元模型」などが展示解説されている。特に、城下町の生活などは「江戸図屏風」のタッチパネルは大変有効な学習手段である。(写真3)



写真3 国立歴史民俗博物館で「江戸図屏風」のタッチパネルの説明を聞く生徒 筆者撮影

このような、博物館のすぐれた教材がもつ教育的効果として、感動が生み出す高い学習への関心・意欲があげられる。今回のフィールドワークをとおして、学校での予備調査（学び）、博物館での展示・解説（調べ）、フィールドでの体験（経験）の連携した学習が有効であることがわかった。

④事後調査（レポート課題）

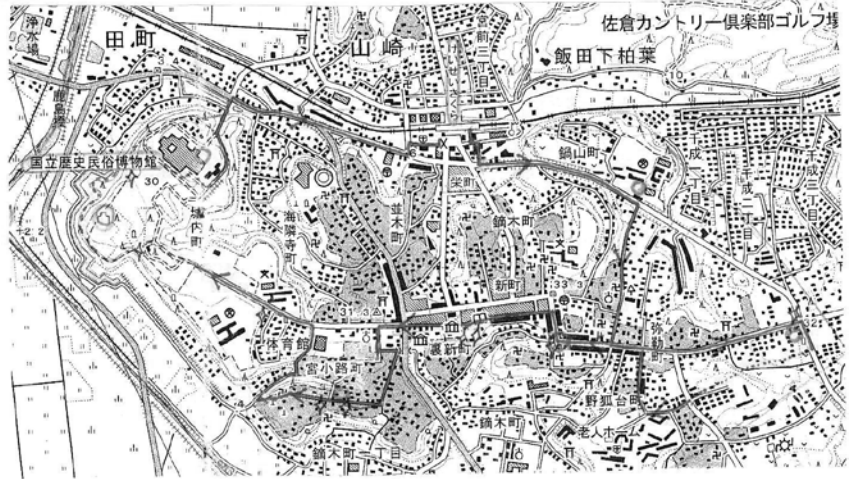
調査した成果はレポートの課題とした。収集データをもとにレポートを提出させた。レポートには地図にルートマップを添付させた。以下、レポートから抜粋して紹介する。下の地図は上図が昭和3年の佐倉鳥瞰図で下の地図は1:25000の「平成17年佐倉」である。フィールドワークの主な見学地を鳥瞰図と地形図に記している。(資料1・2)



資料1 佐倉鳥瞰図 昭和3年

フィールドワークを終えて

- 9:45 京成佐倉出発) 10分
- 10:00 佐倉高校出発) 15分
- 11:25 順天堂出発) 15分
- 11:40 旧堀田隠付近) 10分
- 11:50 直角の道) 20分
- 12:55 武家屋敷出発) 15分
- 13:10 佐倉城着
～散策～
- 16:10 博物館出発) 20分
- 16:30 京成佐倉着



資料2 1:25000 佐倉地形図 平成17年

また、「城下町の形態と機能」について、佐倉の商店街をつぶさに調べている。(資料3)

昭和3年 佐倉鳥瞰図より — どんな店が集まっていたのか?? —
— どれほど現在残っているのか?? —

カウントミスがあるかもしれないけど、どんな公共施設や店が集まっていたのかを調べてみました。

【医療系】

- ・病院 (16)
 - ・歯科 (6)
 - ・内科 (1)
 - ・眼科 (1)
 - ・整骨 (1)
- ・薬局 (3)

【飲食系】

- ・酒屋 (9)
- ・パン屋 (3)
- ・せんべい (2)
- ・おもち (1)
- ・精米 (1)
- ・麩店 (1)
- ・食品 (7)
 - ・肉 (3)
 - ・魚 (2)
 - ・豆腐 (1)
- ・飲食店 (10)
 - ・和食 (5)
 - ・洋食 (4)
 - ・茶店 (1)

【衣服系】

- ・服 (13)
 - ・呉服 (7)
 - ・洋服 (6)
- ・履物 (4)
 - ・くつ (12)
 - ・足袋 (2)
- ・帽子 (2)

【施設】

- ・旅館 (13)
- ・寺院 (11)
- ・神社 (4)
- ・学校 (6)
- ・町役場 (1)

【農業系】

- ・家畜 (豚舎など) (3)
- ・肥料 (3)
- ・タネヤ (3)

【その他】 (多い順) 時計 (5) 出張所 (4) 輪店 (4) 運送 (3) 金物 (3) 写真 (トコヤ) (3) 指物 (3) 家具 (2) ガラス (2) 石材 (2) とうき (2) 百貨店 (2) ブリキヤ (2) 文具 (2) 本 (2) 綿 (2) 油 (1) 印刷所 (1) クリーニング (1) 裁判所 (村木) (1) 質屋 (1) 新聞 (1) 染物 (1) 97シー (1) 板金 (1) 湯 (1) 郵便局 (1) 練炭屋 (1)

京成佐倉駅の北側の少し小高い神社から描かれたと思われる、昭和3年佐倉鳥瞰図は実際よりまがっているが現在の地図と見比べてだいたいこのkm²に及び範囲が描かれている...と思う。上の数値はその範囲内にあった店の業を示している。昭和の佐倉には様々な種類の店があって、それがどういふ具合に分布しているの不自由はあまりないだろう。しかし、農業系は東側に多く見られ、豚舎などは比較的広い土地が必要なので、佐倉駅・佐倉城周辺の人口密集地をさけた結果と考えられる。どんな店が多いかで当時の社会性がわかると思うので自分なりに考察してみました。→次のページへ

資料3 佐倉城下町商店街調査 (昔からのお店)

このような考察が得られると、改めて「フィールドに学ぶこと」がいかに大切であることを再認識させられた。

4. 指導計画 <実践2>

主題「檜枝岐歌舞伎を教育資源とした学校・博物館・フィールドの連携」

民俗学※	民俗学 選択者 (49名)	単元名	日本の伝統・文化 檜枝岐歌舞伎を教育資源として	予備調査2時間 フィールドワーク2日 事後調査2時間
------	---------------------	-----	----------------------------	----------------------------------

①学習のねらい及び指導要領との関連

学習指導要領：平成21年3月告示の高等学校学習指導要領第1章 総則 第1款 教育過程編成の方針2には、「伝統文化を尊重し、それを育んできた我が国の郷土を愛し」と明記されている。このような動向を鑑みて、伝統文化を扱う民俗学の領域から地理学習に有効な教材化を図り、伝統文化を尊重する態度を育む授業として、檜枝岐歌舞伎を教育資源として、学校での予備調査・博物館での調べ学習・フィールドワークの実施までの、「学校」・「博物館」・「フィールド」を連携した体験型学習を企画した。

②使用資料

地図 1:25000 地形図 1:2500 檜枝岐村修正図 ゼンリン南会津郡檜枝岐村
資料 檜枝岐村：「檜枝岐村耕古録」千葉之家花駒座：「檜枝岐歌舞伎」

③展開

過程	時間	○学習活動 ●学習内容	指導上の留意点	資料
導入	2	●民俗学概論 ●民俗学調査法 ●日本の伝統・文化 ●年中行事と祭り ●穂田百姓村 ○調査対象地域の選定 ●歌舞伎・能・文楽 ○調査テーマの設定 ○フィールドワークの方法 ●国立歴史民俗博物館授業 (事前調査・予備調査)	歴史学・地理学との関連 調査方法・研究対象の比較 平家の伝説(落人伝説)の所在 檜枝岐村の概要 檜枝岐歌舞伎 DVD 視聴 民俗調査の方法について説明 研究者による講義と展示解説 日本芸能の流れと展開	民俗学調査法 地理調査法 地形図 1:25000 檜枝岐村地図 ゼンリン地図 檜枝岐村耕古録 千葉之家花駒座 檜枝岐歌舞伎 第4展示室 松尾恒一准教授
展開	2日	●檜枝岐村フィールドワーク ○檜枝岐歌舞伎鑑賞会 〈檜枝岐歌舞伎の保存と伝承の取り組み〉〈農村歌舞伎の分布〉〈檜枝岐歌舞伎の舞台と棧敷のつくり〉〈檜枝岐村の平家落人伝説について〉〈焼き畑について〉〈伝統家屋のつくりと形態について〉〈檜枝岐村の墓の立地と分布〉〈檜枝岐姓と家紋の調査(星・橘・平野姓について)〉〈檜枝岐伝説〉など		現地案内 斉藤弥四郎氏 星長一氏
まとめ	2	●班の調査内容をプレゼンテーション ●班別レポート	表現力(プレゼンテーション) 地図に表現させる 相互評価 授業評価	調査報告書 アンケート

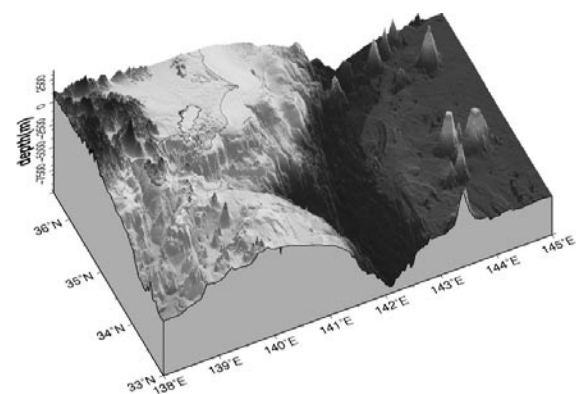
5. 実践の概要 <実践2>

「檜枝岐歌舞伎を教育資源とした学校・博物館・フィールドの連携」

(実施日:平成21年8月18日～19日)

①予備調査 (学校での授業)

民俗学とは、民間伝承を主要な資料として自国民の日常生活文化の歴史を再構成する学問。英語では folk (庶民) と lore (知識) をむすびつけた用語で folklore という。社会科の科目では日本史の文化史・現代社会の芸術文化の単元が該当する。本校では民俗学を授業で実施できるのだが、生徒の自由研究のテーマは様々である。しかし、必要最小限の知識として民俗学の概論と研究方法については導入部で学習しておく。(資料4)



資料4 自然科学と民俗学の違い (地震の原因)
「プレート境界域の海底地形」海上保安庁
海洋情報部のホームページより転載
(www1.kaiho.mlit.go.jp/tbosai.html (平成22年2月25日))



「鯰絵 (鯰に乗る伊勢神宮神馬)」
埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵

学校での授業は、学術的なことより檜枝岐歌舞伎を見たいムードをつくること、夏休みに是非行ってみたいという雰囲気づくり＝興味・関心を助長させることが大切である。

授業内容は、1 歌舞伎の概論(国立歴史民俗博物館からの資料提供) 2 檜枝岐村の歴史(平家伝説) 3 穂田百姓村などの概論と調べ学習が中心

②予備調査 (国立歴史民俗博物館で松尾恒一准教授 (民俗学) による講義『日本芸能の流れと展開』及び第四展示室「比婆荒神神楽」の展示解説

博物館での授業では、展示・レプリカ・ジオラマなどを使って事前・事後の学習をさせる場として有効である。知識のないまま歌舞伎をみても、感動もなく、おそらく90分の歌舞伎公演はもたない。また、実際や実物を見る機会があっても解説が不足することがある。このような問題は博物館で調べ直すことで問題を解決することができる。今回、博物館との連携では国立歴史民俗博物館の松尾恒一准教授による『日本芸能の流れと展開』という主題で授業と展示解説を実施していただいた。(写真4)



写真4 松尾准教授による授業筆者撮影

最初に、神話時代から近世までの伝統芸能の特

徴と変化について、「舞」から「踊り」に変化していることに気づかせて、歌舞伎の成立までの概要をつかませた。次に松尾准教授が監修した小豆島の農村歌舞伎のDVDを視聴した。これは全く檜枝岐村と同規模であり、農民が伝承する文化財としての価値も同じものであり、大変参考になった。また、檜枝岐村が平家の落人伝説の残る地域として、たぶん琵琶法師の語りの芸能が伝授されていることなども推測できる有意義な授業であった。

展示解説では、神楽の社殿や歌舞伎の舞台について、「比婆荒神神楽」の模型展示で解説して頂いたり、第4展示室では実物スケールの村の暮らしや年中行事などの展示があるので、事前にイメージがつかめる。

③フィールドワーク（現地調査）

ここまで、博物館でできるならフィールドに出向く必要はないと思われるが、フィールドで学ぶことはなにより大きい。

学校や博物館ではどんなに優れた授業や展示であっても、それは疑似体験にすぎない。現地に出かけて、直接フィールドに身を置いて、自分の目・手・足など五感を通じて学び取る（感じる）ことが大切である。筆者は地理学と民俗学が専門であり、フィールドワークの手法は授業で取り入れてきた。

現地での活動には、専門的なお話を聞く場合、案内や講師も必要である。講師を依頼する場合、佐倉市のようにボランティアガイドや観光協会などを通じて依頼することも可能であるが、それよりも、現地で生活し、その仕事に関わっている方が理想である。また、授業実施者が現地に赴いて、人脈をつくり、ともに企画することも必要である。つまり、授業実施者は自ら事前に体験しておくことが必要である。こうして、今回の檜枝岐歌舞伎の鑑賞会では檜枝岐の歴史や習俗の研究者で、この檜枝岐村出身で現・御宿小学校校長の齋藤弥一郎先生と檜枝岐歌舞伎の副座長の星長一氏に依頼した。

現地において歌舞伎の伝承と保存については、星氏から稽古場や倉庫などを案内していただき、稽古の風景や衣装道具など、観光客では普段見ることができない裏方の様子なども見学できて、大変有意義であった。この伝承や保存の取り組みが260年も村民だけで継承されてきた文化財的価値は大きい。

檜枝岐歌舞伎を教育資源としたフィールドワークではどのようなテーマが可能か。今回、班を編成してそれぞれ研究テーマを設定させた。

以下の生徒の調査報告書、「伝統文化伝承の取り組み」から抜粋すると、「檜枝岐村の歌舞伎は千葉之家花駒座という一座が公演するのだが、すべて村民出身者で構成されている。普段の仕事は旅館経営者や役場の職員、あるいは農業といった仕事の傍ら稽古に励んでいる。また、講演は奉納歌舞伎として年3回のみでの公演であり、一座の経営は歌舞伎の花代以外はボランティアで、観光目的の歌舞伎ではないことにも驚かされた。村の全人口は約650名で、人口密度は1.7人と日本で一番低い村である。いわば、過疎村の典型であるが、限界集落ではなかった。檜枝岐村では歌舞伎を演じるために、一年働き、歌舞伎を伝承する取り組みが村民としての誇りとアイデンティティを形成している。また、公演日は近隣市町村をはじめ、本校のように他県からの観光客も流入し、それが村を活性化さ

せている。」

④学校での報告会

報告会では、それぞれの調べた内容を共有することができ、檜枝岐村の全体像が理解できた。また、民俗資料を地図に表現する試みからは、興味深い地図が報告された。一つは檜枝岐村の三つの姓（星・平野・橘）と墓と土地利用の相関地図であり、もう一つは、墓を含めた石造物マップである。地図に表現することで、学習目標であった民俗学に地理教育の「地理的見方や考え方」を加えることができ、檜枝岐姓の分布や墓と集落の相関など空間的に考察するなど、学習成果を見いだすことができた。

6. 成果と課題

第1に、今回のフィールドワークの実践から、学校は、「博物館」「フィールド」を有機的に結びつける役割を持っているということが言える。そして、「身近な地域調査」を学習目標にしている地理学習において、この連携に貢献できるものと考えている。

第2に、民俗学は、社会科各教科に関連する学際的な領域があり、特に地理学習においては調査法が共通していることから、この意味からも地理教育の有用性を主張していくことができる。

第3に、参加した生徒の感想だが、一番印象に残ったことを書いてもらうことにした。多数あったものを列挙すると（同趣旨のもの）

260年間の伝統文化を継承する取り組みに感動／檜枝岐村の村民の誇らしげなことに感動した／村民と直接お話しすることができたこと／学校で体育の時間に歌舞伎の練習があること／地図を持って歩くことが楽しい／歌舞伎に興味を持った／平家伝説や落人集落に興味を持った／異次元空間にはいった（日本昔話の世界）／素朴な山里に感動した／秘境に感動／旅行の考え方が変わった／墓や姓に興味を持った／温泉や素朴な食事がよかったなど、調査項目以外にも知的副産物が多く得られたことは予想外の収穫であった。

最後に、今回の実践では新しい発見もあった。それは、檜枝岐歌舞伎は神社の境内でゴザを敷き詰めて鑑賞するのだが、檜枝岐村の人々が大勢の高校生を見る機会は少ないという。生徒にとっても、直接村民と語ることに、新鮮な感動があった。檜枝岐歌舞伎を通じて、高校生と村民が同じ空間で、同じ時間を共有することは、人的交流を通じて学校と地域のコミュニティの形成に役立ち、それが檜枝岐村の活性化につながらうらしい。

「身近な地域調査」は多くの学校で実施しているはずである。しかし、時間的な制約があったり、教師間の連携が難しかったり、安全面で学校の理解が得られないので実施できないという話も聞く。また、博物館の利用も児童・生徒の来館数は減少している。これは、少子化だけの影響でなく、学校としての利用（校外学習）や授業での取り組みが減少しているのではないかと、とも考えられる。

7. わたしの考える歴博活用案

教師は、知的好奇心と興味・関心・探求心を刺激する教材開発、博物館・資料館を活用

できる人材育成をしたい。あたりまえであるが、調べ方を教えるため、博物館の利用のす
すめは授業として実施した方がよい。

(過去の成果のあった実践例)

本校では、博学の課題を出している、「人物探究」「博物館（美術館）に行こう！」「歴
史発見」などのテーマでチケット・パンフ類を添付してレポートを提出させる。次年度は、
「鎌倉街道を歩こう！」「大山千枚田のフィールドワーク」を企画している。前任校の千葉
西高校では、民俗学（第4展示室）を対象にした、「俗信の検証」という課題（信仰・神・
年中行事・河童・天狗・鬼などのテーマで調べ学習）が、意欲的に取り組めたテーマであっ
た。